

## 2011年度 関西学院大阪インターナショナルスクール 学校評価を終えて

関西学院大阪インターナショナルスクール  
校長 ジョン サール

関西学院大阪インターナショナルスクール(以下、O I S)の2011年度自己点検・評価プロセスは、2010年4月の法人合併で学校にもたらされた変化の、最も重要な局面のいくつかを再検討する、重要な機会を提供してくれました。上ヶ原キャンパスにある法人の様々な部門とWASC代表者の方々のご協力、および評価推進委員会のご理解は、このプロセスを成功裏に完了させるためには、極めて重要でした。全ての関係者の努力に感謝いたします。

法人合併の前は、数多くの質問をいただきました。合併が千里キャンパスでの教育にどのような効果を与えるのかということや、異なる機関が運営を担当することにより、学校の経営方法がどのように変化するかといったことなどです。WASCがこのような変化の時期に重要な変更の報告の提出を求めたのは、特にこの理由によるものです。合併から2年が過ぎた今は、これらの質問への答えを見つけるには理想的な調査タイミングでした。この調査では、学校で起こる全ての事柄を支えるガバナンスおよびリソースという見地から、詳細に検討されました。

以前の千里国際学園のガバナンス体制は、O I Sでの学習を有効にサポートすることができるのか、しばしば疑問視されました。報告のカテゴリーAで概説されている強み分野から明らかになったのは、合併が有益に働いて、学校の使命および目的を明確にする方法をもたらしたということです。また同時に、O I S / S I S (千里国際中等部・高等部)の設立趣旨が関西学院の設立趣旨をいかに補完しているかということについて、目を向ける機会ももたらしました。自己点検・評価プロセスを通して導かれた結論は、それぞれの使命は実に有効に補完し合っているということです。そのような認識がもたらされたことで、私たちは確かな基盤の上に立って生徒のための学習プログラムの実施に取り組んでいると、自信を持って言えるのです。また、報告の結論からも理解できる通り、現在採用されているガバナンス体制は、O I Sで実施されている学習を実によくサポートしています。

強み分野が認められた一方で、成長分野もまだ残っており、継続的な努力が必要です。

日本語ベースの法人組織の中で英語ベースの学校を運営するという組合せは、依然として意義のあることです。中でも報告で指摘された通り、文書の翻訳プロセスは、取り組む必要のある分野です。O I S内部、および千里キャンパスと上ヶ原キャンパスとの間の確実なコミュニケーションは、この冒険的事業を成功に導こうとしている法人全体の課題でしょう。

O I Sは関西学院で採用されている体制により慣れ親しんで来ていますが、利用できるリソースを最も効果的に使えば、まだ改善できるはずです。予算の提出プロセスとスケジュールをよく理解し、どのように使えば有効なリソースをもたらし、教室での学習を最もよくサポートできるのかということについて、変わらず取り組んでいます。報告では、教師の評価とリソース配分とをリンクさせる必要と共に、さらに明確な全校アクションプランの作成も強調されています。同じように、生徒の成績達成度を教師や生徒自身が評価し、成績表と明確にリンクさせる必要もあります。この2つのことが示すように、私たちは努力を続けて学校の運営を支え、「学習重視」の方針を維持するための体制作りに取り組み続けなければなりません。

この調査、WASCからのフィードバック、幅広いコミュニティからいただいた全般的なご意見は、法人合併がO I Sにとって前向きな動きであったということ、明確に伝えています。同じことが関西学院全体にも当てはまることを願っています。また、これを足掛かりとして、国際教育の最先端に行く教育プログラムを開発していかれることを楽しみにしています。

## WASC 報告書 (重大な変更) の要旨

WASCによるO I Sに対する2011年度年次評価は、学校法人千里国際学園(S I S F)および学校法人関西学院(KG)の合併による新たなガバナンス体制の有効性に重点を置いて実施されました。

この評価は、学校の認定代理人である米国西部地域私立学校大学協会(WASC)に対する、重大な変更の報告としての役割も果たしました。重大な変更の報告は、2013年に実施されるOISの全面評価の一部に当てられます。

データは6ヶ月にわたって、全ての教職員、および抽出された保護者グループから収集されました。データ収集の方法は、インタビュー、質問書、文書調査、および視察委員会による調査によるものでした。

## A. 生徒の学習のための体制

### 学校の目的

1. 学校は、機関としての理想と理念を反映した明確なミッションステートメントを制定しています。目的は、全ての生徒に対する教育プログラムの基礎となる、認定済みの期待すべき全学的学習成果(全校生徒の成績到達目標)により、さらに明確にされています。

### ガバナンス

2. 統治者は、(a)学校の目的と一致し、期待すべき全学的学習成果(全校生徒の成績到達目標)の達成を支援する方針を採用し、(b)それら方針の実施を専門スタッフに委任し、(c)結果を監視します。

### OIS管理職

3. OIS管理職は、(1)期待すべき全学的学習成果(全校生徒の成績到達目標)を生徒が達成できるよう学校が重点的に取り組むことを促進するために決定を下し、(2)スタッフに権限を与えて、(3)生徒の学習に対する、献身、参加、および共有すべき説明責任を促します。

### 学校の改善プロセス

7. OIS管理職の促進する学校改善は、(a)全生徒に対する学習の質を高めるアクションプランにより推進され、(b)学校コミュニティの支援と関与を受け、(c)学校の仕事を効率的に導き、(d)全校アクションプラン案の監視を通して説明責任に備えるものです。

## WASC カテゴリーA: 生徒学習のための体制、強み分野と成長ニーズ

強み分野
<ul style="list-style-type: none"><li>a. OISは学校に対する明確な使命と目的を持っています。</li><li>b. KGは定評のある組織です。</li><li>c. KGとOISのミッションステートメントは相互に補完し合っています。</li><li>d. OISのスタッフは自身の職務分掌を理解しています。</li><li>e. OISには明確なコミュニケーション手段が存在します。</li><li>f. スタッフには懸念事項を訴えることが推奨されています。</li><li>g. 学校アクションプランに対して、多様な関係者が定期的に寄与しています。</li></ul>
成長ニーズ
<ul style="list-style-type: none"><li>a. KGとOISとの間での明確な翻訳プロセスを開発すること。主な文書は英語に翻訳する必要があります。</li><li>b. 懸念事項が確実に取り組まれるようにすること。(状況のアップデートなど)</li><li>c. 教員評価とリソース配分の間関係性について、その定義をより改善すること。</li><li>d. 全校アクションプランを刷新すること。公表し、協力して再検討する必要があります。</li><li>e. 生徒の学習成果に関する生徒の達成度を監視すること。</li><li>f. 生徒の学習成果達成度に対する幼児部から高等部までの全学年(K-12)生徒の自己反省の仕組みを構築すること。</li><li>g. 成績表の評価データを容易に再検討し、議論し、対策を取れるようにすること。</li><li>h. 教員評価と戦略的計画の間関係を明確にすること。</li></ul>

#### D. リソース管理および開発

##### リソース

1. 学校が利用可能なリソースは学校プログラムの持続に十分であり、学校の目的を遂行し、期待すべき全学的学習成果(全校生徒の成績到達目標)を生徒が達成するために効果的に使われています。

##### リソース計画

2. 統治者およびO I S管理職は、将来に向けた信頼できるリソース計画を遂行します。

#### W A S C カテゴリーD：リソース管理および開発

<b>強み分野</b>
a. 現在のところ、図書館は十分な設備とリソースを備えます。 b. 専門能力開発が体系化され、教師陣のニーズに応じています。
<b>成長ニーズ</b>
a. "...リソース配分に関する決定、学校の目的、期待すべき全学的学習成果、..."の間の関係性を強化すること。予算プロセスは、KGと学校との新しい関係と共に発展します。 b. 視聴覚/技術支援設備の取得に関する手続きを明確にすること。